

日本細菌学会 関東支部ニュース

第26号

第75回日本細菌学会関東支部総会の開催にあたって

第75回支部総会を来る6月27日(木)、28日(金)の二日間にわたり千葉大学西千葉キャンパス内のけやき会館で開催致します。けやき会館は柳の大木の多い西千葉キャンパスに因んで名付けられ、昨年建設された新学会館です。支部総会程度の会合に適したホールと諸設備を持ちきれいな会場です。千葉といえば都心から大分離れた所のイメージがありますが、総武線で1時間程度であり、しかも大学キャンパスはJRの駅前にある交通の便の大変によいところです。

春の学会直後のことで一般演題数は多くありませんが、いずれも内容の充実したものであり、会員相互の忌憚のない活発な討論を期待しております。今回の支部総会は会員の研究発表・討論の場という支部総会本来の目的の他に、会員外にも開かれた学会を積極的に意識して企画致しました。ご存じの様に多くの大学では市民講座など、一般市民のための教育活動を定期的に行っております。多くの学会でも一般市民・高校生などを対象に、それぞれの分野の知識を分かりやすく伝え、また高校生の関心をその分野へ向けるよう、積極的に活動しています。この度の支部総会では会員のみならず、会員外の医療関係者、一般市民をも対象に公開シンポジウムを企画しました。医学的にも社会的にも関心の高まっている2テーマですので、会員外の方々もぜひお誘いし、ご参加下さい。

第1日(6月27日)午後は、野田公俊(千葉大・医)、三上興(千葉大・真核微生物研究セ)両会員がオーガナイザーとなり「ヘリコバクター・ピロリと胃・十二指腸疾患」のテーマで5演者が講演致します。ヘリコバクター・ピロリについては既に多くの特別講演・シンポジウムが行われていますが、まだまだその知識の普及が必要と考えます。薬学領域からでも従来の胃潰瘍治療薬の既成概念が根底から覆るものであり、高い関心が持たれています。今回は基礎から臨床までの総合



総会長 澤井哲夫
千葉大学薬学部

的知識と現時点での問題点を、各分野の第一人者により解説して頂きます。

第2日(6月28日)午後は、水口康雄(千葉衛研)会員がオーガナイザーとなり「結核症とその細菌学」のシンポジウムを4名の演者で行います。高齢者層の増加など社会環境の変化もあり、結核症の急増が再び医学的にも社会的にも関心を集めています。演者は臨床、基礎それぞれの分野の第一人者であり、専門外の参加者にも十分に理解できるよう平易な解説をお願い致しました。

一般演題・シンポジウムのプログラムと会場案内を載せた小パンフレットは、支部総会前に会員の皆様へダイレクトメールでお届け致します。会員外でも参加希望の方にはお送りしますのでご遠慮なくお知らせ下さい(無料、FAX 043-290-2929)。

支部総会のもう一つの役割は、会員のより親密な交流の場を提供することにあります。第1日のシンポジウム終了後、引き続きけやき会館内の広間で懇親会(ミキサー)を開催致します。低兼ね参加費で行いますので、ご参加をお待ちしております。千葉大学は現在9学部、約14,000名の学生数を擁する総合大学ですが、西千葉キャンパスはそのメインキャンパスで、緑豊かなよい環境です。また千葉市は最近、政令指定都市となり、発展を続けている地方都市です。この機会にぜひ千葉へおいで下さい。

第74回支部総会を終えて

明治薬科大学微生物学

新井 俊彦

昨年秋の支部総会に際しては多数ご参加下さいまして有り難うございました。サービスが行き届かなかったことをおわびいたします。

学会、特に地方会は、演題も少なく、時間がそれほど制約されませんから、会員の皆様が直接合って相互に知り合う場を提供するものです。演題は自己紹介ですし、質問はお付き合い頂きたいという申し入れのひとつの形式であろうと思います。ですから、ポスター会場や懇親会は個人的な交際を求める場になります。支部会総会長とはこのような、全国総会では出来ない、研究を介した個人的親睦の機会を十分に提供するのが責務と考えておりました。このように考えますのに、私がこの総会でも如何にこの目的に貢献出来なかったことを痛感し、反省しております。

ただ、私なりに努力を致しました。まず、第一は、これまでご参加の少なかった分野の会員の皆様にも演題をお願いして、それぞれの分野でどのような研究が現在行われているのか知って頂く機会を作ることに努めました。特に、一般演題は、講演と同時にポスターの展示もお願いしました。これは発表者からは大変であると少しお叱りを受けましたが、講演のみでは出来ない、発表者との会員の個人的接触の機会を増やすものとして企画したものです。残念ながら、活用がまだ十分では無かったようですが、これは主催者の宣伝不足によるものであろうと反省しております。

第二に、完成した研究成果のみを紹介するシンポジウムや特別講演を廃して、これからも研究材料が採れる話題提供に切り替えて、聴衆の参加できる内容に変えようとしたことです。時間の制約で十分に目的を達せたとはいえませんが、会員が自分でも直接考えに参加できる企画にしたいと願ったものです。

「細菌感染が疑われながら原因不明な疾患の研究課題」として、Chlamydia 感染、川

崎病、潰瘍性大腸炎、ベーチェット病、サルコイドシスを、また「創薬の基礎研究」として、Helicobacter pylori 感染の問題と治療および緑膿菌感染の問題と治療を取り上げましたが、会場の狭かった前者は満席で、両会場とも好評でしたので安心いたしました。座長の労をお執り下さった、川崎富作、竹田多恵両先生、伊藤武、宇津井幸男両先生、中江太治、佐藤謙一両先生、ならびに貴重な研究内容を提供下さった講演者の皆様、会に参加くださった会員各位に深謝いたします。

もっとも、この学会のプログラム編成には私の私的目的も含まれておりました。ご承知のように私は薬科大学で微生物学を講義しております。大学の教育は、学生が将来社会で専門職として活動するに必要な事柄を単なる事実だけの知識としてではなく、疑似体験として体得させることにあります。その為には教師である私がすべてを体験していなければなりません。これは事実上不可能ですから、学会で実際に体得しておられる方々の発表を伺うことで疑似体験することにしております。従って、将来、薬学生が働く可能性のある分野、製薬企業での研究、医科や歯科大学での研究、衛生研究所や家畜衛生研究所などでの研究検査の現場を知りたい思いました。残念ながら、演題の内容は私に必要なすべてを網羅できたのですが、会長は雑役係で十分に身を入れて聞くことができませんでした。また、貴重な多くの講演を事後出版物に出来ませんでした。これも反省のひとつです。

近年、学会を自己の研究の一方的発表の場と考える風潮が強くとそれが学会活動低調化の原因になっておりますが、参加者全員が発表内容を自己体験として共感できるものにできれば、本当の学会活性化が実現できるものと信じております。

秋の3学会合同シンポジウム開催に向けて

東京女子医大微生物学免疫学教室 中検感染対策科

内山 竹彦

「もしかしたら」と前置きがつきますが、今年は日本の細菌学会関東支部にとって大きな飛躍の始まりかも知れません。それは以下の事情によるものです。

平成8年11月13日(休)と14日(休)に第76回日本細菌学会関東支部総会が東京女子医大弥生記念講堂で開催されます(総会長 内山竹彦)。同じ時期に、平成8年11月15日(休)と16日(出)に恒例の第43回日本化学療法学会東日本支部総会(総会長 日本大学医学部第3外科 中山一誠博士)と第45回日本感染症学会東日本地方会(総会長 順天堂大学医学部総合診療科 渡辺一功博士)の2学会の合同学会が開催されます。前述した「大きな飛躍」のモトは、我が関東支部が上記の2支部に合同学会でも開催してはどうでしょうかという提案をしたところ、その趣旨は大変よろしいですということになり、3学会の支部総会長と、我が吉川昌之介支部長をはじめ國井乙彦日本化学療法学会東日本支部長、松田静治日本感染症学会東日本支部長のご参加を願った会議を含めて多くの会議を開きました。関連した3学会なので合同学会が開かれればお互いに刺激が多く、学問的発展が期待されます。最終的には、合同学会は会場の広さの問題もあり、今回は残念ながら無理ということで、合同シンポジウム開催に落ちつきしました。いろいろなテーマが提案されましたが、3学会に共通したものとして、薬剤の耐性について前述の帝京大学医学部第2内科國井乙彦博士と北里研究所の橋本一博士に計画立案を依頼し、きわめて興味あるテーマと演者を選んでいただきました。題して「化学療法薬は何故効き、何故効かなくなるか」

司会： 國井 乙彦 (帝京大・医・第二内科)、
橋本 一 (北里研・生物機能)

1. 諸言 橋本 一 (北里研・生物機能)
2. 薬剤耐性菌の疫学的考察
生方 公子 (帝京大・医・臨床病理)
3. 薬剤不活性化による耐性
井上 松久 (北里大医・微生物)

4. 作用点の変異による耐性
佐藤 謙一 (第一製薬・創薬第一研)
5. 透過性変異による耐性
中江 太治 (東海大・医・分子生命)
6. 抗ガン剤への耐性
鶴尾 隆 (東京大・分子細胞生物研)

アア、戦闘的、刺激的なテーマと演者ではありませんか。

合同シンポジウムは平成8年11月16日(出)、午後に2学会合同学会の会場である経団連会館で開催されます。細菌学会関東支部総会の参加者は平成8年11月16日にその参加証を経団連会館で提示すれば、別途の会費を支払う必要なく合同シンポジウムのみに参加できます。この合同シンポジウム開催までの道のりには吉川昌之介支部長と平松啓一事業計画委員長の積極的な計画立案と、将来計画委員の各先生方の御協力がありました。先生方、本当にお世話になりました。

さて、この3学会合同シンポジウムを是非とも大成功裏に終了させなければと思いますが、それには日本細菌学会関東支部の会員諸先生の熱い協力がなければなりません。いろいろと問題はあるのです。会場やシンポジウムの日時など、討議すべき問題は多いのです。しかし、「小異を捨てて大同を取る」という言葉もあるではありませんか。どうぞドーンと大勢の会員の皆様にシンポジウムに会場され、活発な討議をお願いします。そのことが、細菌学会と今回我々の注文をいろいろ聴いていただいた2学会の発展につながると信じます。

尚、関東支部総会固有のシンポジウムとして、「ヒトから細菌までのゲノム解析と遺伝子治療の現状(司会 大阪大・微研 木下タロウ博士)」と「感染・発症のメカニズム-病原因子再考(司会 杏林大・医・微生物 神谷 茂博士、筑波大・医・微生物 林 英生博士)」を準備しました。この2つのシンポジウムもとびっきり興味深くかつ戦闘的・破壊的であること請け合いです。さあ、今年11月第3週は目がはなせないですぞ。

フォーラム

「歯学領域における研究動向」

神奈川県歯科大学口腔細菌

梅本俊夫

高齢化社会を迎えて、歯科医師会では8020運動というものを展開しつつある。この運動は「80才台の人でも20本以上の歯が残っている状態を実現する」ということをスローガンにして早期治療や予防処置、さらには一般の人達への啓蒙活動を推進していこうという運動である。80才台ともなれば、4～5本程度しか残っていないのが現状であるから、21世紀までにこの目標を達成することはかなり難しいという感じがしないでもない。歯が喪失する原因の大半は歯周病（いわゆる歯槽膿漏症）か齲蝕症（いわゆる虫歯）によるものであり、これらの疾患はいずれも口腔常在菌によって惹起される。従って、8020運動の達成のためには、口腔細菌研究に携わる者の責任は重いとわざるを得ない。事実、過去100年間に渡る歯学細菌学の歴史は、これら二大疾患の病因解明の歴史であったということができるとし、現在でも国内の21大学歯学部、8歯科大学、1研究所の口腔細菌研究に携わっている者の大半は、大なり、小なりこれらの疾患に関連のある研究に取り組んでいるといっても過言ではない。私自身も歯周病の病因を細菌学的あるいは免疫学的観点から解明したいと考えている。歯周病の細菌学は20年前ぐらいから急速に発展し、現在では、いくつかの病態毎に関連性の強い細菌がクローズアップされている。特に成人性歯周炎といわれる極く一般的な歯周炎では *Porphyromonas gingivalis* が原因菌として有力視されており、その病原因子と考えられている線毛、血球凝集素、トリプシン様酵素、コラゲナーゼなどの遺伝子も既にクローニングされている。更に、線毛やトリプシン様酵素については遺伝子不活化株も作製されており、それらの病原的意義が明らかにされるのは時間の問題とも言える。

ただ、問題なのは適当な実験動物モデルが無いということである。常在菌による内因感染モデルを作ることはなかなか困難で、今後の歯周病研究の発展はこのことにかかっている。

「MRSAの型別調査」

東京慈恵会医科大学臨床検査医学教室

町田勝彦

院内感染症原因菌としてMRSAが問題視されてきた時に、MRSA陽性者の病棟内の配置を見に行った。多くは散在的であって特定の病室に集中しているという印象を持ったので、MRSAの疫学調査を行ってみようという気になった。方法としてファージ型、ゲノム型、薬剤感受性パターン、菌体外毒素の型別を調べた。ファージ型別はコアグラウゼ陰性菌用ファージ3種類を加えると90%以上のMRSAが型別される。その結果3種類のケースが認められた。第1は水平感染である。2ヶ月間で18名の患者より検出されたMRSAの型別調査では外科系病棟2カ所で3例6名の水平感染が認められたが、かなり狭い範囲の感染であった。第2は内因性感染の可能性である。例えば急性骨髄性白血病にて入院した50歳の患者では、入院時には咽頭、尿、便からMRSAは検出されなかったが、化学療法にて白血球が $1800/\mu\text{l}$ になった時点で発熱を認めたためセフェム系抗生物質の投与が行われた。2週間後にMRSAが検出され、型別調査では3種類のMRSAを認めた。これは常在細菌叢に隠れていたMRSAがセフェム系薬剤によって選択されて出現したもので、長期入院している易感染性の患者で時々認められている。第3は患者自身が持ち込んできた可能性で、入院翌日を含めて入院時1週間以内にMRSAが検出された場合などに考えられる。これら3パターンは病院によってその頻度は異なる。私共では1000床中25～35名（平均3%）のMRSA陽性患者が常時認められ、そのうち感染症は5名ほどで他は保菌者である。院内感染対策としての消毒や防疫を行って、水平感染は低下しても内因性感染や患者自身の持ち込みは残るということであろう。MRSAの疫学調査は年1～2回の一定期間行ってみる価値がある。また型別は1種類の方法だけで行わないほうが良い。

〔 掲 示 板 〕

◆第4回国際エンドトキシン学会

(The 4th Conference of International
Endotoxin Society (IES)) の御案内

日 時：1996年10月22日～25日

会 場：名古屋国際会議場

President：中野昌康（自治医科大学）

テーマは“Endotoxin and Sepsis: Molecular Mechanisms of Pathogenesis, Host Resistance, and Therapy”とし、海外からの約40名の招待演者を含めて、Endotoxin and SIRS ほかの6シンポジウム、4セミナーを行います。また、上記テーマにとらわれず、エンドトキシン研究に関連する基礎から臨床にわたるあらゆる演題を募集しています（一般演題は全てポスターとなります）。日本細菌学会会員の諸先生の参加をお願い致します。一般演題の締切りは1996年6月30日です。なお、抄録はThe Journal of Endotoxin Research にSupplementとして収録されます。参加費（抄録集、ウェルカムパーティー、ディナーパーティー等の諸費用が含まれます）は、¥31,500（IES会員）、¥37,800（IES非会員）、¥18,900（学生）です。

10月22日は、この国際学会ではRegistrationとWelcome partyのみを予定しておりますが、同じ会場で第2回日本エンドトキシン研究会（JES）が開催され、国際学会参加者は無料で参加出来ます。この日にもS.Wright氏ほかによる国際シンポジウムを予定しております。

問い合わせ先：

〒480-11 愛知県愛知郡長久手
愛知医科大学、
微生物・免疫学教室
I E S 学会事務局、横地高志
TEL：0561-62-3311 内線2269
FAX：0561-63-9187
E-mail:ies@amugw.

aichi-med-u.ac.jp

ご希望の方にはSecond Circular（演題申し込み用紙を含む）をお送り致します。

自治医科大学 松浦基博

〔お役に立てますコーナー〕

近年多くの学術集会在開催され、価値ある情報が発表されています。その一部は主催者の努力で小冊子として出版されています。微生物学分野の出版では定評のある菜根出版から共同出版という形式で、出版社に赤字を与えない経費を負担すれば、通常の出版物として出版して上げますという申し出を受けています。会員の皆様にもお伝え下さいとの事です。詳細は直接菜根出版にお尋ね下さい。

Tel：03-3261-8887 菜根出版

明治薬科大学 新井俊彦

集 会 案 内

○第16回日本ビフィズス菌センター学術集会

日 時：平成8年6月1日（土） 9:00～18:00

場 所：グリーンホール（昭和女子大学構内）
（東京都世田谷区太子堂1-7）

特 別 講 演：消化管における食品成分の認識機構

シンポジウム：テーマ「腸内フローラと代謝」

問 合 せ 先：（財）日本ビフィズス菌センター

TEL：03-5814-5816

FAX：03-5814-5820

○第3回日本微生物資源学会大会

日 時：平成8年6月27日（木）～28日（金）

場 所：武田薬品工業㈱ 体育館ホール
（大阪市淀川区十三本町2-17-85）

世 話 人：（財）発酵研究所 竹内昌男

問 合 せ 先：第3回日本微生物資源学会大会準備事務局

TEL：06-300-6555

FAX：06-300-6814

○第12回「細菌の病原性とその分子遺伝学」研究会

日 時：平成8年6月29日（土）

場 所：エーザイ本社、本館会議室（東京都文京区小石川4-6-10）

世 話 人：池 康嘉 群馬大学医学部微生物学

問 合 せ 先：北里大学薬学部微生物学教室内 関矢加智子

TEL：03-3444-6161（内線3321）

FAX：03-3444-4831

○第5回内毒素・LPS研究会

日 時：平成8年6月29日（土）13:00～

場 所：北里研究所（東京都港区白金5-9-1）

問 合 せ 先：岩手医科大学細菌学教室 稲田捷也

TEL、FAX：0196-53-8818

○第43回毒素シンポジウム

日 時：平成8年7月22日（月）～24日（水）

場 所：加賀観光ホテル 石川県加賀市片山津温泉

世 話 人：中村信一 金沢大学医学部微生物学

問 合 せ 先：東京女子医科大学微生物学・免疫学教室内

毒素シンポジウム事務局 内山竹彦

TEL：03-3353-8111（内線22713）

FAX：03-5269-7411

集 会 案 内

○第6回日本生体防御学会

日 時：平成8年7月24日（水）～26日（金）
場 所：名古屋市立大学（名古屋市瑞穂区）
問 合 せ 先：学会会長 岡田秀親
（名古屋市立大学医学部分子医学研究所 生体高分子部門）
TEL：052-853-8196
FAX：052-842-3460

○第25回薬剤耐性菌シンポジウム

日 時：平成8年8月29日（木）午後～30日（金）
場 所：群馬県水上町 ホテル聚楽
問 合 せ 先：薬剤耐性菌研究会事務局
群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設
TEL：0272-20-8085
FAX：0272-20-8088

○第41回ブドウ球菌研究会

日 時：平成8年9月5日（木）～6日（金）
場 所：田辺製薬（株）東京事務所
特 別 講 演：MRSA問題のその後
演 題 締 切：平成8年6月末日
世 話 人：井上松久 北里大学医学部微生物学
問 合 せ 先：第41回ブドウ球菌研究会事務局
TEL：0427-78-9355
FAX：0427-78-9349

○第13回微生物シンポジウム

日 時：平成9年9月11日（木）～9月12日（金）（予定）
場 所：東京
問 合 せ 先：明治薬科大学 小河原 宏
TEL：03-3424-1001
FAX：03-5688-0637

第3回日本細菌学会関東支部評議員会

日 時：1995年9月9日（土）、午後2時～5時

場 所：日本歯科大学 1号館4階 第3会議室

出席者：新井俊彦（兼第74回総会長）、池田達夫、伊藤 武、内山竹彦（兼第76回総会長）、大国寿士、奥田克爾、川原一芳、近藤誠一、澤井哲夫（第75回総会長）、佐藤謙一、野田公俊、松浦基博、水口康雄、宿前利郎、吉川昌之介（支部長）、吉田洋子（幹事）、長井伸也（幹事）、古西清司（幹事）

欠席者：井上松久、伊豫部志津子、梅本俊夫、江川 清、平松啓一、辨野義己、山本友子

1. 議事録の承認

第2回日本細菌学会関東支部評議員会議事録については、異議なく承認された。

2. 第74回、75回総会準備状況について

第74回総会（平成7年10月26・27日 こまばエミナースにて開催予定）については新井総会長より、第75回総会（平成8年6月27・28日千葉大学学生会館にて開催予定）については澤井総会長よりそれぞれ準備状況について報告があった。

3. 平成7年度会計監査決定報告

評議員による事前の投票の結果、新井俊彦教授と内山竹彦教授が会計監査に選出され、本評議員会にて承認された。

4. 平成7年度決算（暫定）および平成8年度予算審議ならびに

5. 平成7年度決算の監査結果（暫定）

吉川支部長より、本評議員会において決算およびその監査結果について審議と承認を行うのが通例であるが、現時点から年度末（9月30日）までにまだ相当額の収入と支出が見込まれるため、本評議員会では8月30日までの決算について暫定的に審議し、年度末に再度会計監査を行った後、次回（10月26日）の評議員会にて最終的に審議したいとの提案があった。これについて、了承された。

平成7年度の暫定決算（8月30日まで）の各項目について吉川支部長より詳細な説明があり、これらが適切に執行されていることが確認されたとの報告が会計監査よりあった。これら、決算（暫定）については、

異議なく了承された。ただし、支部長より、本年度の関東支部の会費収入のうち、まだ50%弱しか送金されてきていないとの経理上の問題点が指摘された。

平成8年度予算案については、異議なく了承された。

6. 幹事の追加選出

小西清司助教授（日本歯科大学）が幹事に追加選出された。

7. 各種委員会報告

1) 編集委員会（野田委員長）

日本細菌学会関東支部ニュース第25号発刊にあたり、その内容名称等、会員にとって有用と思われる情報を提供できるコーナーを新設したいとの説明があった。

2) 事業計画委員会（平松委員長の代理、内山第76回総会長および吉川支部長）

平成7年8月7日に、細菌学会関東支部会、化学療法学会東日本支部会および感染症学会東日本地方会の各責任者ならびに平成8年度秋に開催が予定されている各学会集会の総会長が集まり、さらに8月14日に各集会の総会長だけが再度集まり、学会共催問題について話し合われた経緯が報告された。いずれの学会も共同で集会を開催することについては賛成の意向であったが、現実には多数の困難な問題点があることもあわせて明らかになった。そこで、今後も集会の共催実現に向けての努力を支部長レベルで継続的に行うこと、および平成8年度秋の時点での

集会の共催は非常に困難ではあるが、各々の総会長間での折衝は継続して行うことについて了承がなされた。

3) 学術集会委員会（井上委員長の代理、大國委員）

学術集会委員会として今後何をすべきか検討し、当面は第75回、第76回総会開催について各総会長より要請があれば支援する態勢にあるとの報告があった。

4) 将来計画委員会（内山委員長）

今後の活動方針として事業計画委員会から提案された学会活性化案についてさらに検討すること、および三学会共催で集会が行われた場合の活動方針について話し合ったとの報告があった。

5) 本部支部長会（吉川支部長）

平成7年8月8日付で、本部より「支部総会の発表演題については演題名、演

者、所属については日細誌に掲載するが、抄録については掲載しないことが本部理事会で議決されたので協力願いたい。」との通達があったことが報告された。

8. その他

1) 本部理事会における関東支部選出理事の人数の問題について

関東支部の会員数に相応するよう、本部理事会における関東支部選出理事の数を現在の2名から3名に増員するよう本部に要請してはどうかという提案が評議員の中からあった。投票の結果、出席評議員13名中10名が賛成であったため、支部長がこの結果を本部長に伝えることとなった。

2) 支部長より各委員会に対して、来年度における支部活性化の具体案について検討されるよう要望があった。

第4回日本細菌学会関東支部

日時：1995年10月26日（木）、12時～13時

場所：こまばエミナース

出席者：新井俊彦（兼第74回総会長）、池田達夫、伊藤 武、井上松久、伊豫部志津子、内山竹彦（兼第76回総会長）、梅本俊夫、江川 清、大國寿士、奥田克爾、川原一芳、近藤誠一、佐藤謙一、澤井哲夫（第75回総会長）、野田公俊、辨野義己、水口康雄、山本友子、吉川昌之介（支部長）、長井伸也（幹事）、古西清司（幹事）

欠席者：平松啓一、松浦基博、宿前利郎、吉田洋子（幹事）

1. 会員の現況報告

会員数（平成7年9月30日現在）は正会員1418名（対前年14名増）、学生会員77名（22名増）、名誉会員30名（1名増）及び賛助会員44社（2社増）である。

2. 第75回、76回支部総会長選出

第75回総会長には澤井哲夫教授（千葉大学薬学部）が、第76回総会長には内山竹彦教授（東京女子医大）がそれぞれ決定され、総会での承認を受けることになった。

3. 平成7年度決算報告及び4. 会計監査報告

収入の部で、会費収入が317,000円減と

なっているが、これは本部事務移管に伴う一時的な遅延によるものである。その他の項目について内容説明があった。

会計監査（新井俊彦教授、内山竹彦教授）より、この決算に間違いがないことを確認したとの報告があった。

平成7年度決算について、異議なく了承された。

5. 平成8年度予算案審議

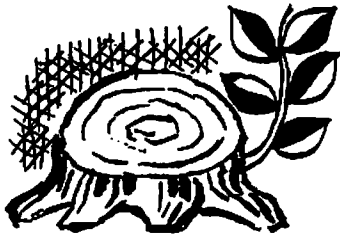
吉川支部長より各項目について内容説明があった。

平成8年度予算案については、異議なく了承された。

6. その他

平成7年度第3回本部理事会記録 B【審議事項】 10. その他 (3)「皆川理事から、吉川関東支部長から北海道支部に『今年の東日本感染症・化学療法学会を関東支部、東北支部、北海道支部が合同で開催してはどうか』との問い合わせがあったが、今年は無理であると回答した、との報告をうけ、この問題を将来的には検討することとした。」について。

関東支部評議員会の代表として、吉川支部長が本部理事会へオブザーバーとして出席し、本記載の誤りの部分について事情説明を行なうことを本部理事会に求めることとなった。



<人事消息>

<昇任>

新井 武利 先生
昭和薬科大学教授 学長に就任
澤井 哲夫 先生
千葉大学教授 副学長に就任
中村 政幸 先生
農林水産省動物医薬品検査所
北里大学獣医畜産学部獣医学科
家禽疾病学教授に就任

<退職>

奥山 雄介 先生
埼玉県衛生研究所 病理細菌部長
工藤 泰雄 先生
東京都立衛生研究所 細菌第一科長
小山 泰正 先生
東邦大学薬学部教授微生物学
元薬学部長

<訃報>

安斎 博 先生
名誉会員 元北里大学教授
平成7年9月26日逝去
須子田 キヨ 先生
元東京女子医科大学教授
平成7年逝去

日本細菌学会
関東支部 ニュース
第26号

(1996. 5. 1)

発行：日本細菌学会関東支部

〒102 東京都千代田区富士見1-9-20

日本歯科大学微生物学教室内

☎03-3261-8311 (内線330)
